高山の文化を高めた人々 72

に借金を重ねるほどの

お

しか

ル

b

なって創刊した「文苑ひだ」、

芝下

刷の技術も稚拙であることに

いた和仁さんは、

他ひ

人と

「山脈詩派の詩人」 林格男

和仁 市太郎 もなかった。 りると、 和仁さんには弟妹

は 「どんな大学者にも道徳家

校はおろか高等科へ進む余裕 そのお 和仁さんの言葉を 養父さん 中等学

和七年

(一九三二) に帰郷し

と謄写技術の修得に努め、

年には、

詩人の虎沢勇治

す 西 刊に参画 主宰とする 及び昭和四

さらに昭和

Ŧi.

飛騨作

家

の創

起して上京。

二年間詩の

にもひけをとらない人道の実

数人の

同士を誘って同人誌

った。

その間に

和仁さん自身は

を創業。

間もなく村田祐作ら

目指す後進の大きな指標とな みなわ」を創刊して、 村宏一に誘われて

て高山市内に

「美踏社工

和仁さんは終生そ

山脈詩派」を創刊するので

郷土の自然と民俗に根を下ろ

ず、宴席の時など決まって誇 の少年時代に育まれたの のお養父さんを敬愛してやま てわが道を行く生き方は、 しく自然を観つめる目、 らしげに、 和仁さんの温厚な人柄 て頑固に 0 思 お養父さんとの少 い出話を語 一本の筋を通 であ それ 5 ある。

一三年

年時

代

和ゎ

市太郎

さんは

船津町

現・ (一九一)

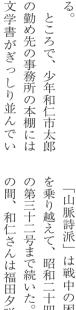
飛騨市

に和仁岩次郎・きくの長

て生まれ、

大正十二

IΗ



神岡水電㈱の給仕として就職

る。

三井鉱山㈱の傍系である

死に遭い、

その後に

和

和仁さんは、

九

歳の時

がに父

高等小学校を卒業すると同



時

「山脈詩

派

を閉じ、

およ

そして、

田夕咲の死を機

めて を発行され 一十歳の













が認められて、

昭和

Ŧī. 十五年 物誌』などを刊行。

そうした長年にわたる業績

区にて』・『薄暮記』・『私の植 した人間性豊かな詩集

自宅にて

文化奨励賞」を、 岐阜県教育委員会から

同じ年高山

顕彰」を授与された。 市文化協会から「文化功労者

は戦

中

· の 困

難

昭和二十四年

また、昭和六十二年には

中部ペンクラブ理事久野治氏

によって、『山脈詩派の詩人 太郎の 「詩業』と題す

版されている。 和仁さんは早くから、

と人間を愛する庶民派詩

して多くの人に親しまれ

てき

らと親交を深めながら研

鑽

馬修を師と仰ぎ、

「飛騨短

る三五〇頁に及ぶ単行本

が

出

和仁さんは福田夕咲

の鎌手白映・

大埜間霽江

な純粋な叙情詩人は 今後は和仁さんのよう もう現

な